

新制中学校における共同体的慣行と近代的価値

— 栃木県下都賀郡生井村立生井中学校の成立と展開 —

小 林 千枝子

1 課題と研究視角

小論は、1947年4月の六・三制発足とともに新制中学校として成立したものの、早くも1958年3月に廃校となった栃木県下都賀郡生井村立生井中学校について調査・研究した、その中間報告である。

新制中学校は、すべての者に保障される義務制の中等教育機関として発足した。しかし、厳しい財政事情のなかでの発足であったため、多くの場合、地域住民の多大な負担を伴った。そうした住民の労苦と新制中学校への期待、そして生徒たちの自治活動その他に向けた積極的な学校生活は、様々な形で語り継がれてきた。たとえば、茨城県結城郡千代川村では、神社にあった「巨木亭々として蒼空に聳えた」7本の老木（＝「神木」）を伐って新制中学校建設資金に充てた¹⁾。いくつかの町や村が集まって組合をつくり、組合立の新制中学校を設置する場合もあった。京都府北部の中郡では、峰山町・吉原村・長善村・新山村・丹波村の1町4村の組合立峰山中学校を設立した。校舎建築が終了したのは1953年5月であった。「敗戦直後、あの窮乏と不安の中で当時一戸一二七〇円という巨額の負担に耐え、釘一本でさえ府のチケットなしでは入手できなかった悪条件を克服して、府下に誇る優秀校舎を完成した」といわれる²⁾。秋田県の西成瀬村立西成瀬中学校では、個性的な教師とともに生徒たちは授業も自治活動も楽しみ、生徒たち自身で校歌をつくり、盛大な文化祭でその校歌を披露するなどしたという³⁾。

新制中学校に向けられた地域住民の負担は、新学制施行という政府方針に対する義務感だけでもたらされたわけではあるまい。子どもたちに学校教育を保障することによって自分たちの居住する地域が活気づいていくことへの期待があったのではないか。新制中学校の成立事情や初期の動向については事例研究が積み重ねられてきている⁴⁾。小論もその一端を担うことになろう。

ところで、小学校6年、中学校3年を義務教育とする六・三制は、1947年4月に施行されて以後、今日まで変わらない。しかし、今日、中学校は全国的な動向として、高度成長を経て高校進学率が90%を超えるとともに高等学校への通過点のように位置づけられがちである。同時に、高校進学に伴う偏差値による輪切り選抜、中学受験の広がり（＝選別の低年齢化）等を背景として、中学校における非行、荒れ、いじめ、不登校、自殺といった

深刻な状態が、もちろんこれが大勢というわけではないが、潜在的な事態も含めて絶えない状況となっている。一方、勤労青少年の教育機関としてはじまった高校の定時制・通信制課程は、今やセーフティ・ネットとしての高校へと性格を変えてきた⁵⁾。

戦後初期の新制中学校が高校への通過点として位置づくようになることは、少なくとも設置当初の時点では、地域住民はもとより制度設計者も考えなかったろう⁶⁾。思春期から青年前期を過ごす中学校に独自の存在意義がないわけではない。この時期をすべての子どもがそれぞれに豊かに生きられることは、日本社会のあり方を左右するほどの課題であるといっても過言ではない。

中学校が高校への通過点と位置づけられる事態は、いつ、どのような事情によって生じたのか。

赤塚康雄は、戦後教育改革には「限界」があり、中学校における能力主義教育はその必然的な帰結であると説く⁷⁾。その限界とは、教育の機会均等実現のためには、経済力が不十分であるために通学できない子どもたちに対する教育機会の提供を可能にする手立てを、講じなかったことである。その結果、心ある教師たちによって、夜間中学校が開設され、成果があったにもかかわらず、文部省は教育機会の均等を守るという理由から、夜間中学校廃止に向けての行政指導を行ったという。そこにみられた機械均等の論法は、夜間の義務教育と通常の義務教育との間に生じる学力格差は、戦前の高等小学校と中学との間に生じたそれと同じであるため六・三制のねらいとは異なる、というものであった。結局のところ「能力的に優れている生徒ほど、より優れた教育を受け得るとする立場」を文部省は採用し、それが主流となり、「社会的弱者の子弟が集中的に切り捨てられる側に回された」と、赤塚はいう。

能力主義教育は学力格差だけでなく、高校進学率の上昇とともに不登校やいじめ等々の諸問題を生み出していった。そうした問題が社会問題となり誰の目にも明らかになったのは、1960年代の高度成長を経たころであった。1950年代後半から1970年代にかけての高度成長に伴って様々な変化があった。市町村合併とともに小中学校から高校に至るまで統廃合が行われた。その過程で、小論で扱う生井村立生井中学校のように消滅を余儀なくされた中学校も少なくない。

こう考えると、赤塚のいうように「戦後教育改革の限界」があるにしても、もう一つ、高度成長期に何が切り捨てられたのかをも明らかにする必要がある。赤塚も指摘するように、戦後教育改革は日本に近代市民社会をもたらそうとしたものでもある。赤塚は、それを徹底させなかったと指摘することに加えて、職業や性の違いによって教育機会が異なる前近代社会の矛盾が、財政力の違いに対する配慮を欠いた能力主義という、戦後教育改革の矛盾を根底にして現れてきたと指摘する。そうであったにしても、前近代社会の共同体的価値観から近代的価値観への転換は、政策によって一気に実現するというものではない。

高度成長期が歴史研究の対象になった今日では、日本における前近代的価値観から近代的価値観への変容の可能性を、政策よりもむしろ人々の生きられた歴史のなかに求めることが要求されよう。そう考えたとき注目されるのが、高度成長期を境にして六・三制の性格が異なってきたことを指摘した、中内敏夫の六・三制研究「六・三制の社会史—『生い』と『老い』の社会史—」⁸⁾である。

中内は、六・三制が始動するのは、「教育爆発」と「学校化社会」が成立した1960年代であるとする。ただし、その始動した六・三制は、修正六・三制であるとする。中内によれば、六・三制は、①一元的な単線型の学校制度、②個人優位、③相対評価、④地方分権、の4点を特徴として成立したが、守旧派政府の「逆コース」政策によって修正された。そうしてできた修正六・三制の理念型は「中央一極集中型の多元的学校制度に、職業専門課程寄りの教育と国家意識形成のための教化という二種類の教育過程を相対評価を評定尺度にして担わせたもの」である。では、それ以前の1947年から1950年代についてはどうとらえたらよいのか。中内は、制度的には六・三制がはじまっていますが、社会史的にはそれ以前の状態、中内の表現で示せば「数世紀の歴史をもつ人づくりの『共同体論』的な二つの形態」が有力だったとする。「二つの形態」のうちの一つは、学力も学歴もかわらない「ウデー本」の社会（＝「ウチの農業大学」システム）、つまり、家族や地域社会によって脈々と受け継がれてきた家業のための職業能力を重視する社会である。もう一つは、学歴を求めたとしても、それは「イエ」のため、「郷党の名誉」のためという、個人意識未成立の社会である。まさに学校化社会ならぬ共同体社会であったというのが中内の論法である。この共同体的社会を反映して、「1950年代にいたる学校を舞台とした競争は、絶対評価システムのもとで、久富善之というところの『抑制された競争』のかたちをとり、競争するにしてもたてまえのうえでは競争しないふりをしての競争という『妙な競争』のなかに子どもや親たちは生きていた」と、中内はいう。

中学校が既述のように深刻な問題を呈してきているのは、中内ふうにいえば修正六・三制の一つの結果であるといえよう。では、修正以前の六・三制時代は、修正六・三制を準備するだけだったのだろうか。六・三制は、旧来の共同体社会に個人優位を含む先の4点をもちこむものだったのである。それらが共同体社会の論理と食い違ったり妥協したりするなかで、新たな力学が生じた可能性もあるのではないか。

共同体色が濃かった1950年代前後の時期に、修正六・三制とは別のものが、しかも共同体の延長上に位置づく可能性は、果たしてなかったのだろうか。その可能性があったとすれば、それを押しとどめたのはどういう力関係ゆえなのか。

小論は、1940—50年代だけに存立した生井村立生井中学校の生きられた歴史を明らかにしようとするものである。そこから出てくる課題は、旧来の共同体社会に、教育機会の平等性や個人優位等が併合されたときの可能性や問題点等（＝力学の構造）を明らかにする

ことになる。相対評価が新設の中学校で教師たちや生徒たちにどう受けとめられたのかも探りたいが、現時点では、ここまで触れられるほど調査が進んでいない。

2 栃木県小山市における中学校の新設と統廃合

—消滅した中学校に注目して—

(1) 旧生井村について

旧生井村は、現在、栃木県小山市の一部となっている。小山市は現在人口約165,000人で、栃木県では宇都宮市に次いで多い。新幹線が止まり、都心のベッドタウンの北端でもある。現在の小山市は戦後初期の2町8村が合併を重ねて1965年9月に成立した。21世紀を迎えたところ全国的に合併が進み（＝「平成の大合併」）、小山市でも近隣の市町との合併が検討されたが、合併はしておらず、1960年代のままを保った。高度成長期に企業誘致を進めて、市の中心部には工業団地がいくつかある。利根川に連なる思川が市の西部に流れ^{おもいがわ}ており、思川以西は広大な田園地帯、かつ穀倉地帯である。

旧生井村は1889年の町村制施行時に成立し、下都賀郡生井村であった。戦後、「昭和の大合併」のなかで1955年4月に間々田町に合併され、続いて1963年4月に小山市に合併された。現在、旧生井村は生井地区として一つのまとまりを保っており、^{あじと}網戸、^{きら}檜木、生良、上生井、下生井、白鳥の6つの大字からなる。このうち網戸は、藤塚、中坪、追切、折本、本宿の5つの小字を有している。白鳥から藤塚まで南北に細長く広がる地域である。

旧生井村は小山市の南西に位置し、思川以西に広がる。河川改修以前は思川、^{うずま}巴波川、渡良瀬川にかこまれた「水場」であり、それゆえに良質の米に恵まれた。同時に水害に見舞われやすい地形でもあった。なお、足尾鉍毒事件により水没する憂き目にあった旧谷中村のあった渡良瀬遊水地は、旧生井村の西南に広がる。また、古くから養蚕業が盛んで、17世紀末ごろは全国的に有数の蚕種業の地域であった。開国後間もない1859年に貿易がはじまると、生井村の蚕種は栃木県産の産種の90%近くを占めた。養蚕技術の伝授と養蚕教師の養成をめざして、1890年には下野蚕業伝習所が創設され、ついで富基館伝習所も設立された。「生井桑摘み唄」は現在も伝統芸能として存続している。民権家の田中正造や福田友作を支援する人材も輩出している⁹⁾。学制発布の翌年、1873年に生井村には二つの小学校が設置された。分校ではなく独立した小学校を二つ創設して、かつ存続させてきたのは、それだけ裕福な土地柄であったことによるだろう。その二つの小学校が、現在の下生井小学校と網戸小学校である。下生井小学校は渡良瀬遊水地に最も近い小学校である。

小山市の小学校と中学校の新設および統廃合一覧表

1950年代 の合併後 の市町村	戦後初 期の町 村	中学校と小学校	
小山市 1954.3.31 ～	小山町	下都賀郡小山町立小山中学校 (1947.4～) → <u>小山市立小山中学校</u> (1954.4～)	
		小山市立小山第二中学校 (1955.4～) 小山市立小山第三中学校 (1980.4～) 小山市立小山城南中学校 (1987.4～)	
	大谷村	小山第一小学校 (1873～)、小山第二小学校 (1904～)、旭小学校 (1973～)、 小山城東小学校 (1977～)、小山第三小学校 (1981～)、小山城南小学校 (1982～)、 小山城北小学校 (1983～)、若木小学校 (1984～)	
		下都賀郡大谷村立大谷中学校 (1947.4～) → <u>小山市立大谷中学校</u> (1954.4～)	
間々田町 生井村合 併 1955.4.25 ～	間々田 村	下都賀郡間々田町立間々田中学校 (1947.4～) → <u>小山市立間々田中学校</u> (1963.4～)	
		小山市立乙女中学校 (1988.4～)	
	生井村	間々田小学校 (1873～)、乙女小学校 (1975～)、間々田東小学校 (1984～)	
		下都賀郡生井村立生井中学校 (1947.4～) → 間々田町立生井中学校 (1955.4～) 間々田中学校に統合 (1958.4) のため廃校	
寒川村合 併 1956.9.30 ～	寒川村	下都賀郡寒川村立寒川中学校 (1947.4～) → 間々田町立寒川中学校 (1956.9～)	
		間々田中学校に統合 (1958.4) のため廃校	
		学区変更により寒川地区は美田中に通学 (1967.4～)	
美田村 1955.2.11 ～	豊田村	下都賀郡豊田村立豊田中学校 (1947.4～) → <u>小山市立豊田中学校</u> (1963.4～)	
		豊田北小学校 (1873～)、豊田南小学校 (1874～)	
	中村	下都賀郡中村立中中学校 (1947.4～) → 美田村立中中学校 (1955.2～)	
		中小学校 (1873～)	小山市立美田中学校 (統合1964.4～)
	穂積村	下都賀郡穂積村立中学校 (1947.4～) → 美田村立穂積中学校 (1955.2～)	中小学校 (1873～) 穂積小学校 (1973～)
桑絹村 1956.9.30 ～	桑村	下都賀郡桑村立桑中学校 (1947.4～) → 桑絹村立西中学校 (1956.9)	
		→ 桑絹町立西中学校 (1961.8～) → <u>小山市立桑中学校</u> (1965.9～)	
	絹村	萱橋小学校 (1873～)、羽川小学校 (1873～)、羽川西小学校 (1977～)、 小山城北小学校 (1983～)	
		下都賀郡絹村立絹中学校 (1947.4～) → 桑絹町立絹中学校 (1961.7～)	
		→ <u>小山市立絹中学校</u> (1965.4～)	
		福良小学校 (1873～)、梁小学校 (1873～)、 延島小学校 (福良小の前身、勸善学舎の延島分校として1873～)	

- 備考
- ・アンダーラインは現存の中学校。
 - ・編みかけは戦後の六・三制発足とともに成立した中学校。
 - ・間々田町と美田村は1963年4月18日に小山市に合併した。
 - ・桑絹村は1961年7月1日に桑絹町となり、1965年9月30日に小山市に合併した。
 - ・下生井小と網戸小は現在、小規模特認校。2013年5月現在の児童数、下生井小35名、網戸小52名。

参考文献等 各学校のホームページ
 小山史編さん委員会『小山のあゆみ』1977年
 栃木県中学校長会『栃木県中学校二十年史』1968年
 間々田町立生井中学校『昭和三十二年改 学校沿革誌』1957年
 ほか

2013年11月、小林千枝子作成

(2) 校名が消えた中学校の歴史

「小山市の小学校と中学校の新設および統廃合一覧表」をみると、六・三制発足時に2町8村のすべてに中学校が設立されたことがわかる。よって現小山市には戦後初期に中学校が10校存在した。そのうち、生井中学校は生井村が間々田町に合併した3年後に廃校となっており、合併が直接的な廃校の契機となったと考えられる。寒川中学校についても同様である。当初の10校のうち、廃校となったのは、生井中学校と寒川中学校のみである。旧生井村に隣接する旧穂積村の穂積中学校は、旧中村の中中学校と統合して美田中学校となったため、名称はなくなったものの廃校とはいいがたい。これらは皆、思川以西の動きである。

逆に中学校をどんどん新設させたのは旧小山町である。高度成長期の人口増を反映して、中学校が4校に、小学校は1970年代以後に6校増えて8校になっている。

廃校となった生井中と寒川中のうち、とくに寒川中については、間々田中学校に統合することへの抵抗が強かったことで知られる。1958年2月、間々田町教育委員会および間々田町議会にて、寒川中を間々田中に統合させること、当分の間分校として存続させることが決定した。1959年8月、寒川分校廃止のはずであったが、住民は廃止に反対して旧分校で自主学習を展開したというのである。「寒川校存廃問題」として新聞にも載り、話題になった。結局のところ、1959年12月に栃木県知事が翌年の7月末まで分校校舎を間々田中学校臨時寒川出張所とするという調停案を出して、期間限定の授業を続けることで解決した。寒川小の卒業生は、その後学区変更により、1967年4月からは間々田中ではなく美田中に通学することとなった。なお、寒川小卒業者のなかに、1957年および1958年の時点で、間々田中ではなく隣接する、現栃木市の大平中学校に進学した者が2名および4名いた。その後、全員が間々田中に通学するようになるが、1966年度より美田中通学者が多数になっている。1966～1968年度は、間々田中に行く者と美田中に行く者とがいた。それぞれどのような判断によるのかは未詳である。

一方、生井中学校区の二つの小学校、下生井小と網戸小は、生徒数減が甚だしく、2010年ごろより小規模特認校として学区外から通学する生徒を受け入れることで存続を保っている。この両小学校は現在、乙女中学校を学区としているが、選択制導入により、卒業生は申請により、間々田中か美田中のいずれかにも通学可能である。

ところで、小山市の中学校の戦後史をひもといていくと、各町村に中学校があった時代には、今日では考えられない、地域産業を反映した、ある種の教育的豊かさが存在していたことがわかる。とくに注目されるのが旧中村と旧穂積村の場合である。

中中学校は1947年4月に創設され、1949年3月に校舎ができるまでの2年間は中小学校の5教室を使っていた。教員は9名だが、うち3名は小学校との兼務。1年103名、2年86名、3年54名ではじまった。独立校舎に移るとともに中中生徒会が結成され、1950年4月には栃木農業高校の分校が中小に設置された。分校の初年度生徒数は34名だったという。こう

して旧中村には小学校、中学校、そして高校までそろったのである。

穂積中学校は1947年4月に穂積小に併置された。初年度は「1年生のみ義務就学で、2・3年生は自由就学」。教室数が足りなかったため午前と午後に分けて二部制授業を行った。当初の生徒数は216。教員は校長を含めて6人。翌年度中に新校舎建築。この年の第1期卒業生は男子11名、女子6名の17名。1949年2月にPTA結成。学校経営面では、農業に力点をおいた産業教育に力を入れ、1950年に家畜舎を完成させて、豚、山羊、乳牛などを購入してその飼育実習をはじめた。果樹園も設置して苗木の植樹をはじめ、そして花壇も完成させた。こうした取り組みは全国的にも注目されたようで、1950年12月に東京中央放送局（現NHK）のラジオ放送で全国に紹介されたという。1951年2月開催の第1回栃木県穂積豚共進会では穂積中飼育の豚が1等に入賞して各種の賞を獲得した。1951年には家畜用井戸を設置し、飼料保存のためのサイロも完成させた。1952年度には産業教育振興研究校の指定を受け、穂積村としても産業教育協力委員会を立ち上げたというから、村と中学校が共同歩調をとっていたことがうかがえる。1954年2月には、過去2年間の研究成果をまとめた「村の発展を指向する教育課程の研究とその実践方法の研究」をテーマとした研究集録を刊行したという。中小学校に栃木農業高校の分校が設置された背後には、隣村の中学校におけるこのような農業教育振興があったのである。

以上の、寒川中、中中、穂積中の戦後初期の動向は、小山市立美田中学校が発行した『校舎竣工満20周年記念誌』（1986年）によって知ることができた。美田中は中中と穂積中が統合して新たに創設された中学校である。よって、中中と穂積中の双方の伝統のうえに美田中が成立したことから美田中の記念誌に中中や穂積中の歴史が記されることになったといえよう。寒川中についても言及されたのは、旧寒川村が美田中の通学区になったことによるだろう。

3 生井村立生井中学校の成立と展開

(1) 統合された間々田中から生井中をみる

統合とはいえ実質的には間々田中に吸収合併された生井中についてのまとまった記述を、少なくとも現時点では、記念誌等の刊行された文献から見出すことはできなかった。栃木県中学校長会発行の『栃木県中学校二十年史』（1968年）には各中学校の沿革誌が書かれている。美田中については穂積中と中中それぞれが創設のときから記されている。間々田中については、なぜか校舎落成の1949年9月16日から記され、統合された中学校については次の一文で終わっている。「年々生徒数が増加し、昭和三五年九月、生井中学校・寒川中学校との統合が完結し、生徒数一、二七五名、学級数二六学級、職員数校長を含めて四二名となり、大規模校としての様相を呈するにいたった」¹⁰⁾。生井中は旧間々田町の人口が増加するなかで、その存在すら忘れられていくかのようなのである。

しかし、その間々田中に、生井中の歴史を伝える、すべて毛筆の史料が保存されていた。「昭和三十二年改 学校沿革誌 間々田町立生井中学校」と題する表紙を付した文書である。この文書は、統合された間々田中学校に「要保存」の印を押されて保存されていた。

同文書は、一冊に綴じられてはいるものの「生井村立生井中学校沿革誌」と題した藤間賢隆^{とうまけんりゅう}執筆の部分と、以下の概要とで紙の大きさが異なる。藤間は、生井中学校の二代目校長であった。

- 一、沿革概要
- 二、学校経営の目標
- 三、学級編制及び職員組織
- 四、職員表
- 五、教育関係者一覧
- 六、年度別卒業生
- 七、PTA沿革其他
- 八、歴代校長

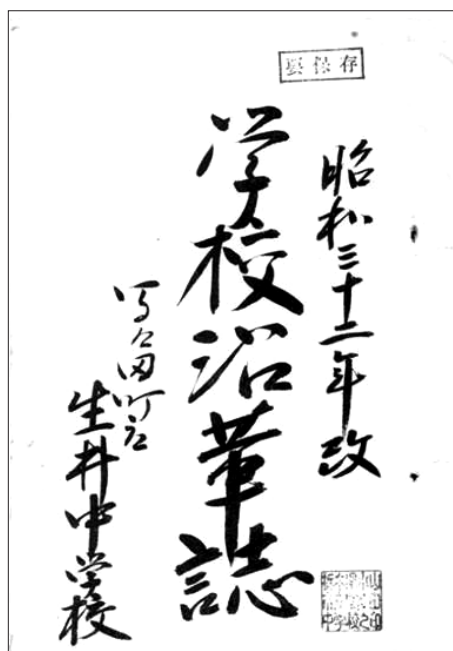
二は「昭和三十一年度」と書かれており、1957年4月に「職員協議」により作成した、とある。これに限らず、七も「昭和三十二年九月調」とある。一方、「一、沿革概要」には「廃校」まで記されている。これらのことから、生井中の廃校が決定してから、あるいは廃校に及んでから、既存書類を整理して、1957年に改めて「間々田町立生井中学校」の沿革誌を作成し、それに、生井村が間々田町に合併される前に藤間が記しておいた「生井村立生井中学校沿革誌」を付して、一冊に綴じたものと思われる。

(2) 生井中学校の創設

藤間執筆の「沿革誌」によると、生井中は「教育に熱意」をもっていた当時の民選村長・立野茂が「苦慮」して発足した。国民学校初等科卒業生を1年生に、国民学校高等科1年及び2年を終えた者のなかから希望者を募って中学2年生、3年生にした。このうち義務制は1年生のみである。その結果、1年112名、2年76名、3年44名での開校となった。初年度の卒業生が1932年4月～1933年3月生まれの子世代である。

開校したとはいえ校舎があるわけではない。そこで「既設建物」を利用することにし、1947年4月28日、網戸神社社務所、網戸小および下生井小の「一部及付属建物」、生井村

間々田中学校に保存されている
生井中学校の「学校沿革誌」



の中央に位置する生良地区の農業協同組合の建物の一部を「仮校舎として授業を開始」した。初代校長には、下都賀郡の姿村南校長（姿村の南小学校長か）の石塚和一を「迎いた

り」¹¹⁾。「職員数九名」。

立野村長を中心とする「中学校建築委員会」の立案により、1947年9月14日の村議会で、「十二教室総二階建及付属建物」を総工費340万円にて建設することを全会一致で決定した。ところが、その翌日、「大洪水に見舞われ全村水浸し」となってしまった。カスリーン台風として後世に語り継がれることになる大水害である。この当時の旧生井村は現代と地形が異なっていた。既述のように旧生井村は豊富な水資源を抱えた穀倉地帯だったのだが、水害は近隣町村よりはるかに大きかった¹²⁾。下生井小校舎の一部が流出したため1カ月余りの臨時休校となった。その後、下生井の事務所を借用して仮教室とし、初年度の授業はここで終了となった。

その後、校舎建設委員会が再発足して、1949年1月に起工式をあげた。この年の11月から「全村民挙って労力奉仕をなし」、1950年3月完成。総敷地1140坪、建坪224坪。総工費約300万円。1950年3月31日に開校式を挙げ、全生徒がはじめて集まった。このとき（1949年度）、生徒数315名、職員数11名。

1950年度は生徒数311、職員数11で、7学級。1951年度は生徒数277、職員数9で6学級。1952年度は生徒数262。この年、中野栄泰が校舎南方の敷地180坪を提供して敷地拡張が行われる。1953年度には西側に約90坪の土地提供があり、「上生井より畠の土を運搬し校庭を整理した」。同年12月に電話が架設。

中野栄泰は生井中学校所在地の生良に在住しており、戦前に村長を務めていた。村民による労力奉仕やこうした地元有力者による土地財産提供があって、生井中学校は地元

(3) 生井中学校の沿革

以下に、「昭和三十二年改 学校沿革誌 間々田町立生井中学校」の「一、沿革概要」を全文、引用する。ただし、漢数字を算用数字に、旧字体を新字体に改める。〔外丸〕は校長の押印を示す（以下、同様）。

- 昭和22年4月1日 学制改革に依り創立校名栃木県下都賀郡生井村立生井中学校と称す
- 昭和22年4月28日 開校初代校長石塚和一氏職員数8学級数6生徒数232にて網戸神社々務所網戸下生井両小学校の一部及び農業協同組合の建物一部を借用授業を始める
- 昭和22年9月14日 村議会は総工費340万円を以て二階建12教室及び附属建物新築を満場一致議決す
- 昭和22年9月15日 近年稀なる大洪水あり全村浸水下生井小学校々舎の一部流失し臨

時休業一ヶ月余儀なくさる下生井西部落事務所借用授業をなす

昭和23年4月1日 第二代校長藤間賢隆氏就任職員数10学級数5生徒数267網戸小学校に2学級下生井小学校に1学級生良農業協同組合に2学級借用分散授業をなす

昭和24年1月15日 新構想の下に本校舎建築に着工建築委員長立野義氏当る

昭和24年9月1日 校章制定

昭和25年3月31日 竣工式挙行敷地1,140坪建物224坪（平や建）工費300万円

昭和25年4月1日 新校舎に移転生徒数311となり7学級編成職員11となる

昭和25年12月14日 優良子供組合として栃木県知事より表彰を受く

昭和26年4月1日 生徒数277となり6学級に減職員数9となる

昭和27年9月22日 敷地80坪拡張さる

昭和28年5月22日 西南に90坪の校庭拡張さる

昭和28年8月12日 湯沸所設置さる

昭和28年12月4日 電話架設さる（部屋局17番）

昭和29年4月1日 第三代校長山中鶴松氏就任職員数9学級数6生徒数261

昭和29年5月8日 鶏舎家畜舎を新築す

昭和29年12月14日 校歌制定発表会行う作詞片桐顕智氏作曲細谷一郎氏

昭和30年4月25日 町村合併により校名栃木県下都賀郡間々田町立生井中学校となる

昭和30年4月27日 北浦助一氏より二宮尊徳像の寄付を受く

昭和31年4月10日 ピアノ購入披露会開催す

昭和31年7月11日 創立十周年記念として同窓会より校旗の寄贈あり樹立式を行う

昭和31年12月10日 理科教育振興法の適用をうけ理科備品の整備なる

昭和32年4月1日 第四代校長外丸孝雄氏就任職員数9学級数6生徒数221にて当る

昭和32年11月1日 創立十周年記念事業として放送施設の更新装置のこと完成す

昭和32年12月26日 創立十周年記念式典を学校・教育委員会町当局・PTA四者共催にて盛大に挙行す尚図書充実の為生徒より月々一定額の拠出のこと決す

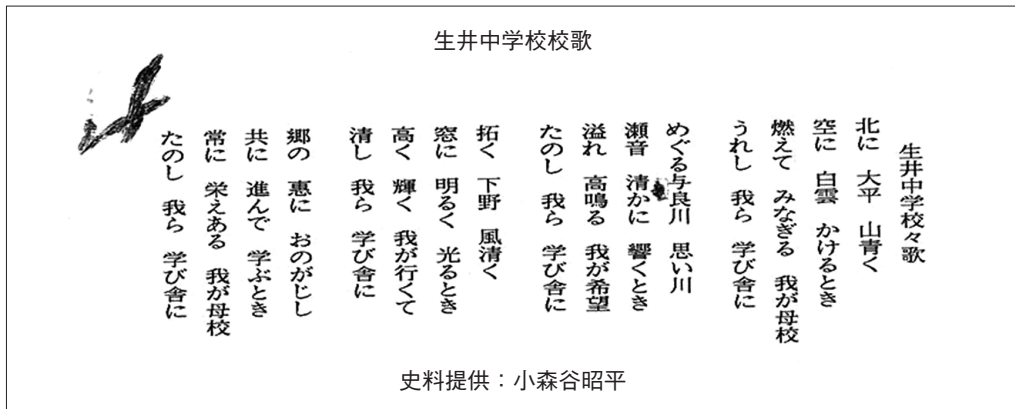
昭和33年2月16日 町議会に於て学校統合のこと議決（昭和33年3月31日を以て廃止昭和33年4月1日より間々田中学校に統合当分生井分校として存置）あり

昭和33年3月31日 廃校〔外丸〕

以上の経緯をみると、1957年秋に創立十周年記念式典を開催し、生徒とともに図書の充実に励もうとしたその1、2か月後に町議会で統合が決まっている。「沿革誌」をみる限り、統合は、学校を担う教職員や地域住民、そして生徒たちの思いとは異なるものだったようにみえる。

また、上記史料中の町議会議決内容である「当分分校として存置」については、現時点

での聞き書き調査等によると、実施されなかったのではないと思われるが、確証は得ていない。



(4) 学校経営の目標

1957年4月の「職員協議」で「学校経営目標」を「設定」したようである。その全文を次に示す。

二、学校経営の目標

昭和三十三年度（四月職員協議設定〔外丸〕）

地域の歴史と伝統の上に「常に健かにして誠たれ」と念じつ、日本的民主公儀の理念と行動に生きる生徒の成長発展を図る

全人教育を期し左のことにつとむ

一、健康の保持増進

- 1、衛生環境の改善と健康生活の習慣養成
- 2、健康管理につとめ体育の生活化を図る

二、基礎学力の向上

- 1、国語数学を中心として学習に必要な基礎的能力の向上も図る
- 2、物事の見方考え方を指導し問題解決の基礎的能力の向上を図る

三、道徳教育の強化

- 1、特に民主的社会を形成する協力的態度を養成する
- 2、秩序と礼儀を重んずる明るい学校の建設に努力する

四、科学教育の振興

- 1、観察を深め、疑問から出発する学習を重んずる
- 2、理科職家の設備を最高度に活用し科学的生活をさせる

五、産業教育の振興

- 1、勤労に対する正しい信念の確立につとめる
- 2、職業指導の強化につとめる

1957年、生井中は、設備も整ってきて、さあ、これからが本番だと意気込んでいたように見受けられる。そうして、この「学校経営の目標」を設定したとも考えられる。そう考えると、統合は、学校の現実と離れたところからやってきたように思われる。何ゆえの統合だったのか。その真意は何なのか。

なお、ここにある五項目は、戦後初期の新制中学校の、めざすべき方向を示しているだろう。「道德教育」を、「協力的態度」、「秩序と礼儀」ととらえている。これが、民主主義的な主権者の育成に通ずるかどうかは、この表現だけでは判明し得ないが、「道德」を「民主的社会」と結びつけている点は注目してよい。

(5) 学級編成と職員組織、学校関係者

1957年度の学級編成が1957年4月時点でまとめられている。以下、漢数字を算用数字に、縦組みを横組みに改めて引用する。

職員は、校長・外丸孝雄（49歳、社会担当、1957年4月着任）のもとに次の8名の教諭がいた。校長を除けば、30代の女性二人、30代の男性二人、あとの4人は皆20代前半の男性という教員構成であった。

学年 級 性	1 年			2 年			3 年			総 計	備 考
	1 組 (担任 和気)	2 組 (担任 赤羽)	計	1 組 (担任 岡田)	2 組 (担任 稲葉)	計	1 組 (担任 大根田)	2 組 (担任 小森谷)	計		
男	17	16	33	17	18	35	19	20	39	107	途中入学 1 名 (二男) 在籍221 (昭33.3月)
女	19	18	37	21	20	41	19	17	36	114	
計	36	34	70	38	28	76	38	37	75	221	

教諭・瀬下吉雄、33歳、数学と体育担当、1952年4月着任（教頭）

教諭・岡田トシ、36歳、国語と音楽と習字担当、1953年4月着任

教諭・篠原都子、31歳、家庭と国語担当、1957年4月着任

教諭・大根田清次、33歳、数学と職業指導担当、1951年4月着任

教諭・小森谷昭平、24歳、社会と図画担当、1955年4月着任

教諭・和気邦、24歳、理科と体育と職業指導担当、1955年9月着任

教諭・赤羽司郎、24歳、英語と社会と国語担当、1957年4月着任

教諭・稲葉千秋、24歳、理科と保健体育担当、1957年4月着任

以上の他に、「公仕」（用務員と思われる）1名、内科の校医1名、歯科の校医1名がいた。「教育関係者一覧（昭和32年度以降）外丸」は、生井中学校の成り立ちを知るうえで興味深い史料である。氏名は省くが、次の面々が挙げられている。

一般行政：町長、助役、収入役

議 会：議長、副議長、教育民生常任委員長

教育委員会：委員長、副委員長、委員（3名）、教区長、事務局長、事務局次長、書記（2名、うち一人は年度途中で他課に移り、もう一人が年度途中から兼任から専任になる）

P T A：会長、副会長（2名）、庶務（教頭）、会計（教諭の一人）

その他（一）：同窓会長（第一回卒業生）、社会教育委員長、P T A連絡協議会会長（2名）、体育協会長、消防団長

その他（二）：生井地区出身の町会議員（7名）、生井青年団長（同窓会長と同一人物）、生井婦人会長、生井公民館長（P T A会長と同一人物）、生井支所長、生井農業協同組合長、網戸小P T A会長、下生井小P T A会長、下生井郵便局長、生井地区児童委員（8名）、駐在巡査

とくに「その他（二）」に示されるように、生井地区の重要メンバーが「関係者」として生井中学校にかかわっていた。このことは、生井中学校の村の学校としての位置づけを連想させる。

5 聞き書き調査をはじめ

(1) 卒業生に聞く

第1回卒業生で青年団長と同窓会長を務めた人物A（男性、1932年11月生まれ）と、第4期卒業生B（1935年10月生まれ）から聞き書きすることができた。

Aは中学校卒業後、ヤミ米運びの手伝いで金を稼ぎながら東京の電気専門学校に通って勉強したという。高等科2年を卒業して中学校に進んだが、誰もが行ったわけではないという。教科書はガリ刷り。先生は算数と国語と理科の先生ぐらいしかいなかったし、小学校のおさらいのような勉強だったという。Aは生井青年団長も務めていたが、長男ではないからとの理由で、家を出ざるを得ず、東京へ出た。東京では夜に土方仕事で稼いで、電気関係の短大に相当する専門学校で勉強した。

Bは卒業式に袴をはいた記憶があるという。高等女学校は昔は高嶺の花だった。それが小学校から中学校に一律に行けるようになってほっとしたし、嬉しかった、先生は7歳ぐらいしか年上でなかった、肩掛けの布鞆だったと語る。教科書は無償で支給されたともい

う。高校は城南高校に進んだ。家庭の事情により中途退学して東京へ出た。

もう一人、調査という形はとらなかったが、話す機会があって、1941年生まれの第10期卒業生（女性）からも折に触れ話を聞いた。統合案が出されたとき、間々田中まで通うには自転車が必要だという理由で反対があったことから、通学者全員に中古自転車相当の金額を支給することで統合を認めさせられたという。廊下で卓球をしたが、狭かった、体育館もなかったし、施設は貧弱だった、とも語る。

(2) 教師に聞く

1957年当時、生井中学校で社会と図画を担当していた元教師に聞き書きすることができた。彼は1932年6月生まれで、生井中学校一期生と同世代であった。旧制の栃木中学から新制栃木中学校の3年生になり、続いて新制栃木高等学校に編入した。1955年3月に早稲田大学史学科を卒業し、その後すぐに生井中学校に就職した。就職時には教員免許はもっていなかった。当時、免許をもたずに教員職に就いた者が多かったと語る。

生井中は玄関が職員室になっていて、そこに学校目標が貼ってあったが、学校目標について議論した記憶はないという。運動会は村をあげて行い、校区の二つの小学校の子どもたちが応援にくるなどしてにぎやかだったという。とはいえ運動場は台形で、設備面の貧弱さは一目瞭然だったようである。制服が決まったのは1955年。冬にはみな半纏を着ていたので、赤やら青やらで教室が色鮮やかだったという。生徒たちを一行に一斉に並べて、北から「藤塚、中坪、……」と点呼したという。ピアノ設置は寄付によるという。また、PTA会長の中野栄泰は、松下村塾を例にとり、建物も貧弱でも立派な学校になるといっていたという。立野村長の挨拶は「天に一点の雲もなく地に微塵の風もなく」と言っではじまるのが常で、曇っていてもそう言ったという。

青年団長の「フユちゃん」（上記のA）とは宿直室でよく話しており、校旗をつくれれば統合されないだろうと話したことがあるというから、生井中が間々田中に統合される可能性は事前に示唆されていたのだろう。遠足については、1、2年はバスで出かけ、3年は汽車とバスで清水、箱根に二泊で出かけたという。学校予算は寄付に頼っていたとも語る。

6 旧生井村に生きた内科医の経験

生井中学校の内科の校医、岡安恒武は、「生井中学校沿革誌」には間々田町乙女在住と記されているが、1953年8月に旧生井村に診療所を開業し、一時期を生井村で過ごした、栃木市出身の、耳鼻科が専門の医師であった。寄生虫駆除のために尽力し、その経緯を『村の健康革命—白鷺の村—』¹³⁾と題する書物に記し、1956年に公刊した。同書は1950年代の旧生井村の様子を伝える貴重な記録である。同書によれば、岡安医師は詩人でもあり、『朝日新聞』の「学芸欄」に「農村の夜は明けるか」と題する一文を掲載した。その一文には「冬

でも蚊帳をつる」や「青ぶくれの農民」といった小見出しがつけられ、村民たちの反感を買ったようである。しかし、冬でも蚊帳をつるのは「蚊をふせぐためでなく、ハエがうるさくて病人が寝ていられないから」¹⁴⁾であった。また、「この地方の農民の多くが、顔いろがすぐれない、いわゆる青ぶくれしている」のは、寄生虫によるものであった¹⁵⁾。村人の反感を買いながらも、この一文が契機となって寄生虫の集団駆除が行われるに至るのだが、紆余曲折を経ての実施であった。

さて、開業の拠点となったのは、生井村の生良に三代続いた医師のA教授宅だった。「長男の教授が、少々偉くなりすぎたので、開業医としての跡をつがれず、医院はもとの運転手が留守を守っているほか空家になっていた」¹⁶⁾という。A教授は1947年の洪水時には生井村で医院を開いていた。A教授は、岡安医師着任に際して旧生井村を訪れた際、洪水時のことをこう語ったという。「家内は病気で寝たきりで、洪水にあいましたが、よまりましたなあ。ほかに医者がないので、舟にのせられて検視にあるかせられましてね、六人みましたが、ここらもこの二階だけは水がつかないので避難してきます。そう岡安先生も、その時は、面倒をみてやって下さい」¹⁷⁾。旧生井村のたった一人の医師であったと見受けられる。また、この医師宅には十二指腸虫にかかわる試験室もあり、三代続いたというから、旧生井村の文化レベルの高さが連想される。

しかし、岡安医師の目に映った旧生井村の農民たちは、「外聞」を気にし、国民保険加入の制度ができていないため、医者診察を受けないまま「死んでから呼びにきて、死体検案をさせられる事件が続出した」¹⁸⁾という。また、村が明るく健康的になるためには、我慢しないことが大切だと説く。「いままで農民の良い性質に挙げられていた、我慢強さを、私は、悪い性質だとまでいいたい」¹⁹⁾と。そして、同書は次の一文で結ばれている。「寄生虫がいることはきたなくて、我慢ならぬ、蚊も蠅も、ボスたちも我慢ならぬ、そうした根本的な心の態度が、農村の健康の土台であると思う」²⁰⁾と。

岡安医師は、同書で、村人の病状を実名で記したこともあり、いわばつまはじきされて村にいられなくなったと聞く。しかし、同書出版後の1957年時点でも、住所は生井村を離れたが、生井中学校の校医であり続けており、生井村で暮らしにくくなったとはいえ、明瞭な対立が生じたわけではなかったように思われる。実際、同書には、寄生虫駆除に向けて「婦人」や「青年層」がリードしたことも記されている²¹⁾。

7 下生井小と網戸小児童のアンケート調査から

生井中学校区の二つの小学校の4～6年児童に次頁に示す内容のアンケートを行った(2013年11月)。回収率は下生井小が22名分で100%、網戸小が28名中26名分で93%だった。

アンケートの1～3の結果は次々頁の「生井中学校についてのアンケート結果」の表の通りであった。

なくていい理由としては「おとめの人となかよくなれるから」、「間々田中に行きたいから」、「人数が少ないから」、下生井小と網戸小だけでは「人数が少ないと思うから」等があげられた。

現代の小学生の祖父母世代が生井中学校の卒業生であるため、「おうちの人から聞いてわかったこと」の欄には、貴重な情報が寄せられた。もちろん、無答が多いし、「聞いたけどわからなかった」と書いた子もいる。なかには、一例だけだが、祖父母自身が書いたとみられる記述もあった。以下、子どもの表現を基調にしながらも「おじいちゃん」は「祖父に」にするなど整理して箇条書きで示す。なお、両小の児童は宿泊学習等で一緒に行動しており、同学年の児童は互いを知っている。

1、生井中学校があったことを知っていましたか。どちらかに○をつけてください。

・知っていた ・知らなかった

2、生井中学校は次の6地区のうちのどこにあったと思いますか。○をつけてください。

・下生井 ・上生井 ・白鳥 ・生良 ・楢木 ・網戸

3、生井中学校は間々田中学校に吸収合併きゅうしゅうがっぺいされたのですが、そうならないで現在まであったらよかったと思いますか。○をつけてください。

・あったらいいと思う ・なくていい ・どちらともいえない

4、3で、それぞれに○をつけた理由を書いてください。

5、できたら、おうちの人に生井中学校のことを話してみてください。おうちの人から聞いてわかったことがあったら、それを書いてください。書ききれなかったら、うらにも書いてください。

アンケートの5については以下のようなことが書かれた。

<下生井小>

- ① 高等科1年と2年は小学校に通い、3年次は中学校に行った。1学年約40名、約7割が中学校へ進んだ。自転車で通学したが、その道は現在はない。(この世代は生井中の1期生である—小林注)
- ② (上記と同じことに続いて、次が記される。—小林注) 忠霊塔のところまで土手があり、2年のとき台風で流され、3年生のときは、農協の倉庫に板をしいて勉強した。新校舎に入れずに卒業した。
- ③ 昭和9年生まれの人から聞きました。この世代は3期生。皆、生井中学校ができるというので楽しみにしていたそうです。出来上がって入学するまでは大変だったが、新しい学校に入るのとてもうれしかったそうです。でも1

生井中学校についてのアンケート結果

	下生井小学校								網戸小学校								両校	
	4年		5年		6年		計		4年		5年		6年		計		計	
1	知っている	知らない	知っている	知らない	知っている	知らない	知っている	知らない	知っている	知らない	知っている	知らない	知っている	知らない	知っている	知らない	知っている	知らない
	0人 0%	4人 100%	2人 20%	人 80%	0人 100%	8人 100%	2人 9%	20人 91%	2人 17%	10人 83%	6人 60%	4人 40%	2人 50%	2人 50%	10人 38%	16人 62%	2人 25%	36人 75%
2	4年		5年		6年		計		4年		5年		6年		計		計	
	正解	誤答	正解	誤答	正解	誤答	正解	誤答	正解	誤答	正解	誤答	正解	誤答	正解	誤答	正解	誤答
	2人 50%	2人 50%	7人 70%	3人 30%	3人 38%	5人 63%	12人 55%	10人 45%	3人 25%	9人 75%	7人 70%	3人 30%	3人 75%	1人 25%	13人 50%	13人 50%	25人 52%	23人 48%
3	4年		5年		6年		計		4年		5年		6年		計		計	
	あつたら	なくとも	あつたら	なくとも	あつたら	なくとも	あつたら	なくとも	あつたら	なくとも	あつたら	なくとも	あつたら	なくとも	あつたら	なくとも	あつたら	なくとも
	2人 50%	0人 0%	2人 50%	7人 64%	2人 18%	2人 18%	5人 63%	0人 0%	3人 38%	14人 61%	2人 9%	7人 30%	7人 58%	2人 17%	3人 25%	6人 60%	3人 20%	2人 20%

下生井小5年の一人が3番の問いで、二つに○をつけた。それは二人分に集計した。

網戸小5年は12人中10人提出であった。この学年以外は全員提出した。

年勉強した訳ではなく、卒業。その後、何年か過ぎて学校が壊されると聞いたときはとても残念だった。学校ができるまで農協だと思うが、あいているところを直して網戸の生徒と下生井の生徒でせまいところで勉強したそうです。(1年次から入学した最初の世代。洪水に見舞われ、勉強どころではなかった思いがあるのかもしれない—小林注)

- ④ 現在の農協の場所にあり、1クラス40～50人くらいで、2クラスあった。
- ⑤ 現在69歳くらいまでの人が通っていた。
- ⑥ 祖父が中学2年までであった。生井公民館の隣の場所(生良)にあり、歩いて通った。忠霊塔のすぐ東に旧思川があった。生井公民館は昔桑畑だった。

<網戸小>

- ① 建物は1階。1クラス30人くらいで2クラスあった。教員が交代で宿直室に泊った。農繁期と農閑期があった。昭和32年に廃校になって、のちにJ Aになった。音楽室と理科室と職員室と校長室があった。「父兄」が弁当を持ってきて学芸会(踊り、劇、歌)などを見た。
- ② 生井中学校は昭和32年ごろなくなった。今の農協の場所が校舎だった。
- ③ 祖父がもしかしたら一期生。
- ④ 生良に倉庫みたいなものがあってそこにあったらしい。
- ⑤ 今と違い木材でたてられていたので寒くてたまりませんでした。おそまつでした。生井地区にあったので通うには良かったと思います。勝手なことを言ってますみませんが、この地区に小・中学校があると良いと思います。他の人からも聞かれます。ほんとうに良い学校でした。(祖父母自身が書いたとみられる。—小林注)
- ⑥ 今の72歳の人までが通った。
- ⑦ 祖母の話。結婚して網戸に来た昭和20年代にはあった。その後なくなった。
- ⑧ 昭和22年新制中学校ができたけれど校舎がなくて農協の倉庫を間借りしていたそうです。23年か24年に新校舎が現在の小山農協生井支店のところにできたそうです。祖父は4月に入学し、30分田んぼ道を雨や風の中通ったそうです。中学3年のときに間々田町と合併し間々田町立生井中学校になりました。昭和33年に間々田中学校に統合されて生井中学校は廃校になりました。

以上から、現代の生井地区の小学生4～6年児童の4人に一人は生井中学校が存在したことを知っていた。生井中学校は生良にあった。そのことを正確に把握できた子どもが半数を超えるのは、生良に現在、生井公民館や駐在所等があることから連想したのかもしれない。生良は旧生井村の中央に位置する。なぜか「あったらいいと思う」が半数おり、多

数である。両小学校は小規模特認校であるため、学区外入学者がおり、その学区外入学者は「あったらいい」と考えない可能性が高いことを考えると、生井地区の小学生は、地元志向が高いといえそうである。

さて、子どもたちが祖父母から聞いた情報は、板敷きの狭い間借り教室など、リアルである。思川の河川改修により道路等が大きく変わったことも伝えている。



網戸小学校の児童が提供してくれた生井中学校の写真

7 まとめと今後の課題

生井中学校は「民選村長」の熱意により創設された。1947年度中に校舎建築が決定され、洪水の被害がなければ1948年度は新校舎で授業がはじまったに違いない。しかし、大洪水に見舞われ、建築に予定した費用は災害復興にまわさざるを得なかった。再び予算計画が立てられ新校舎で授業がはじまったのは1950年4月だった。「湯沸所」が1953年8月に設置されているから、新校舎には職員室だけでなく給湯室もなかったのだろう。それでも土地の提供、二宮尊徳像の寄付等があり、地域住民の労力提供もあって、施設は少しずつ整えられようとしていた。土地を提供した中野栄泰は戦前に旧生井村村長をしていた人物である。戦後、公職追放されたが、生井中学校の有力支持者であり、公民館長やPTA会長も務めていた。

校舎ができ、校庭が拡張され、給湯室や鶏舎・家畜舎ができて、電話も架設された。校歌や校旗が制定され、1957年12月26日には創立十周年記念式典が開催された。その前年にはピアノを購入し、披露会を開催している。小学生のアンケート回答に、学芸会をやって「父兄」が弁当持参で見にきたというのがあったが、ピアノ披露会にも村人が集まったことだろう。ピアノをはじめて見る住民も多かったろう。生井中に土地を提供した旧村長は、

生井中を松下村塾になぞらえて、施設・設備が貧弱ながら自分たちでつくった新しい中等教育を存続させようとした。同窓会長と青年団長を務めた第1期卒業生は、たった1年しか通わないものの、卒業後も生井中に入出入りして、その存続を願った。村内各団体の「長」も「関係者」として生井中にかかわっており、生井中学校は生井村とともにあった。それはいいかえれば、生井中は共同体とともにあったということである。共同体がつくった学校とさえいえるだろう。

では、その共同体とはどのようなものだったのか。古くは蚕種業で栄え、民権思想が流入し、三代続いた医者も戦後初期までいた。その医師は、湿地帯であるこの地域に多かった寄生虫の研究を手がけていた。文化面での一定の高さが認められる一方で、結局は村を出ていくことになった栃木市出身の医者が指摘するように、「外聞」を気にし、ただただ「我慢」する多くの農民がいた。共同体といっても様々である。旧生井村の場合、階層構造はどうなっていたのか。こうしたことがらを明らかにするためには、近世におけるその農村としてのあり方までも視野に入れねばなるまい。

生井中は、その学校経営の方向性として、「地域の歴史と伝統」（＝共同体的慣行）と「日本の民主公儀の理念と行動」（＝民主主義の実現）を結びつけようとしていた。その内容は、健康、基礎学力、道德教育、科学教育、産業教育であった。ここにあるのは「ウデー本」の世界ではない。生井中は、これまでと違って「衛生環境」を改善し、もっと「科学的生活」が必要であると展望していた。穂積中のように農業を「科学的」に展開することも展望していただろう。ここには共同体がもつ新しい可能性が潜んでいる。

こういう学校が市町村合併とともに廃校を余儀なくされていった。市町村合併は、小さな自治体ではなく大きな自治体を展望することだった。市の中心部に人も学校もたくさん集まり、周辺は人も少なく学校は遠い、という小山市の動向は、全国的に進んだ事態でもある。こういう事態を、1950年代に、国も地方行政も選択した。もう一つ、農業から工業へと大きく舵を切った国の産業計画も無視できない。農業から工業へと、国が、そして小山市が選択した方向性が生井中廃校を促したことは間違いない。しかし、新制中学校に希望を寄せた地域住民は、小さい自治体ながらも独立した学校をもち、それを通して村に民主主義を育てようとしたのではないか。

聞き書きしたAもBも、生井地区に残らず、東京へ出て、いずれも働きながら専門学校で学んだ。その後、Aは電気関係で、Bは服飾関係で独立した。生井中の生徒数も年々少しずつ減少していった。国の方向性は青少年を東京方面へと突き動かすものとして作用し、生井中廃校の内なる要因を形づくったと考えられる。

一方、アンケート調査を通して見られたように、生井地区に生き続けた卒業生もたくさんいる。生井地区の子どもたちに少なからぬ地元志向が認められるのも、そうした祖父父母世代の影響下で育ったことを想わせる。今後、さらに卒業生や教員であった方々等の聞

き書き調査を続けて行くとともに、統合された間々田中の動向や、美田中、中小にあったという栃木農業高校の分校についても調査・研究を広げていきたい。いずれも思川以西の農村地域での動きである。

註

- 1) 中内敏夫・竹内常一・藤岡貞彦・中野光『教育のあしおと』平凡社、1977年、19～20頁。
- 2) 小林千枝子『戦後日本の地域と教育－京都府奥丹後における教育実践の社会史－』学術出版会、2014年、365頁。
- 3) 矢口高雄『ボクの学校は山と川』講談社文庫、1993年、参照。
- 4) 伊藤日出男「初期新制中学校教育の状況と地域文化活動―秋田県における1事例から―」『青森保健大紀要』第1巻第1号、2000年3月、赤塚康雄「新制中学校の解説と課題―大阪市における準備過程を通して―」、大矢一人「新制中学校の設立と軍政部―岡山県を事例として―」、庄司他人男「新制中学校の開設と地域社会―山形県最上郡舟形中学校の事例から―」、三輪光彦「地域社会と六・三・三制―その理論的諸問題―」、いずれも『地方教育史研究』第27号、地方教育史学会、2006年5月、古川和人「戦後復興期における新制中学校独立校舎建設に伴うコミュニティ・ファイナンスの研究―埼玉県南埼玉郡八幡村八幡中学校の事例から―」『地方教育史研究』第32号、全国地方教育史学会、2011年5月、峰岸誠「新制中学校発足当時の状況と特徴」『玉川大学教師教育リサーチ年報』第3号、2013年7月、その他。
- 5) 小林千枝子「定時制高校からのメッセージ―教育目標・評価論の社会的課題を探る―」『作大論集』第3号、作新学院大学、2013年3月、参照。
- 6) 土持ゲーリー法一『六・三制教育の誕生』悠思社、1992年、三羽光彦『六・三・三制の研究』法律文化社、1999年、その他、参照。
- 7) 赤塚康雄『新制中学校成立史研究』明治図書、1978年、174～214頁。
- 8) 『「古い」と「新しい」』藤原書店、1992年、所収。
- 9) 鈴木芳行「碓井要作」『小山・近代を生きた人々』小山市教育委員会、1993年、参照。
- 10) 栃木県中学校長会『栃木県中学校二十年史』1968年、246頁。
- 11) イとエの区別を設けないのはこの地域の方言である。
- 12) カスリーン台風の実態や惨状については、旧生井村民のドキュメント記録『カスリーン台風メモリアル60 被災体験談』（小山市、2007年）に詳しい。旧生井村は、このときほどの水害は稀だが、それでも水害の多い地域であった。筆者は旧生井村の網戸に在住している。筆者の子ども時代の家は1919年建立だったが、水害を想定しての日常的には使用しない荷物置き場ふうの2階を備えていた。
- 13) 岡安恒武『村の健康革命―白鷺の村―』新評論社、1956年。
- 14) 岡安恒武前掲書（13）132頁。
- 15) 岡安恒武前掲書（13）125～126頁。
- 16) 岡安恒武前掲書（13）16～17頁。
- 17) 岡安恒武前掲書（13）34頁。
- 18) 岡安恒武前掲書（13）233頁。
- 19) 岡安恒武前掲書（13）135頁。
- 20) 岡安恒武前掲書（13）238頁。
- 21) 岡安恒武前掲書（13）136～137頁。

<付記>

- ・小論作成にあたっては、間々田中学校の福富靖教頭、下生井小学校と網戸小学校の児童と先生方、そして小山歴史研究会の石川学氏および小森谷昭平氏にお世話になった。記して感謝する。
- ・小論は日本学術振興会の科学研究費補助金（課題番号23531020）を受けて進めた研究の一部である。